

高地下水位地帯におけるソラマメの栽培技術 第2報 着莢数と葉数

木場達美・高森敬一¹⁾・森田敏雅
(熊本県農業研究センター・¹⁾熊本県農政部)

Tatsumi Koba, Keiichi Takamori and Toshimasa Morita:
Cultivation of Fava on Lowland Paddy (2)

ソラマメ栽培で慣行となっている4本仕立2条振り分け誘引は、摘花・摘莢・収穫等の管理作業が行いにくく作業に時間を要する。そこで、作業効率が高く、高品質生産が可能な整枝法を検討した。

第1報では、作業性に優れる1条誘引において茎間隔を22.5cm、着莢数8莢以上で安定した収量を得られる事を報告した¹⁾。ここでは、1条誘引における着莢数と着莢節位上の葉数が収量・品質に及ぼす影響について検討した。

1. 材料および方法

試験は熊本県農研センター農産園芸研究所野菜部八代研究室の露地圃場で行った。供試品種は‘陵西一寸’を用い、2000年10月1日に催芽、10月6日～31日まで3℃で25日間冷蔵処理を行った後、11月1日に露地条件で播種した。栽植様式は畦幅106cm、株間67.5cm（栽植本数139本/a）、整枝は3本仕立直立1条誘引とした。施肥量はN:P₂O₅:K₂O=1.1:1.4:1.1 (kg/a)とした。収穫は2001年5月1日～18日に行った。試験は、着莢数（茎当たり6莢、8莢、10莢、12莢）、摘芯位置（着莢数+0葉、+2葉）について収量・品質を調査した。

2. 結果および考察

収量：総収量（総莢数および総莢重）は、着莢数の増加に伴い多くなり12莢が最も多くなった。しかし、1莢重は着莢数にかかわらず55g前後であり、差はなかった。

また、着莢数上2枚で摘芯を行うと着莢数上0枚摘芯よりも収量が多い傾向となった。

第1表 総収量（1区5株当たり）

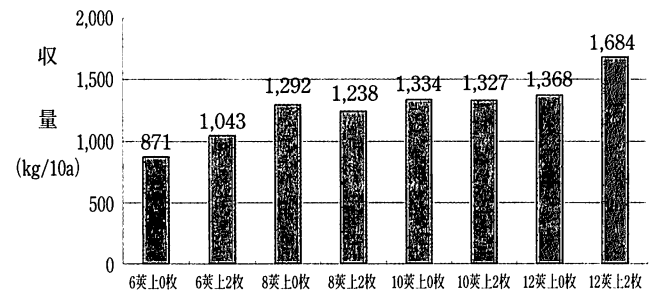
処理名	総 収 量		
	総莢数	総莢重	一莢重
	(莢)	(g)	(g)
6莢上0枚	84	4,487	56.4
6莢上2枚	109	5,716	54.4
8莢上0枚	118	6,118	60.3
8莢上2枚	110	6,520	50.4
10莢上0枚	129	7,387	55.5
10莢上2枚	141	6,865	46.1
12莢上0枚	139	7,174	55.8
12莢上2枚	168	9,125	54.0

品質：可販果の発生割合は、着莢数が増加するとやや低下したが、収量の増加に伴い発生数量は増加の傾向にあった。

第2表 可販果収量（1区5株当たり）

処理名	総 収 量			
	数量・重量		割 合	
	莢数	莢重	莢数	莢重
	(莢)	(g)	(%)	(%)
6莢上0枚	84	4,419	95.6	98.5
6莢上2枚	109	5,506	93.8	96.3
8莢上0枚	118	5,897	92.6	96.4
8莢上2枚	110	6,162	93.1	94.5
10莢上0枚	129	6,687	87.2	90.5
10莢上2枚	141	6,732	94.3	98.1
12莢上0枚	139	6,876	86.4	95.8
12莢上2枚	168	8,707	89.6	95.4

また、商品として価値の高い3粒莢以上の発生数も、着莢数が多くなるに連れて増加した。



第1図 3粒莢以上の収量の比較（10a当たり）

以上の結果より12莢着莢させ、その上位2葉を残して摘芯することが収益性の高い摘芯方法と考えられる。

参 考 文 献

- 1) 高森敬一・森田敏雅・石田豊明：九農研 63, 2000.